

日本保健医療社会学会ニューズレター (No.107) 2018/2/8

目次

1. 会長からの新年の挨拶
2. 第44回大会について
3. 30周年記念事業関連報告
4. 第3回理事会報告
5. 定例研究会の案内・報告 (関東)
6. 定例研究会の案内・報告 (関西)
7. 渉外・国際交流活動報告
8. THE 14TH APSA CONFERENCE, Hakone Japan, 5-7th October 2018 の案内
9. 追悼文: 本会元名誉会員 木下安子先生を偲んで
10. 編集後記

1. 会長からの新年の挨拶 (檜田会長)

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

保健医療社会学会は、2019年に学会創設30周年を迎えますが、すでに各種広報でお伝えしていますとおり、2018年の第44回大会を「プレ30周年大会」と位置づけ、この大会(細田満和子大会長)と翌年の大会(中村美鈴大会長)の2年間をかけて、保健医療社会学の未来を展望していく予定にしております。会員の皆様には、是非とも、このふり返り活動に積極的にご参加下さいますよう、お願い申し上げます。

関連企画としましては、すでに、昨年9月と10月には、「学会の未来を考える座談会」(第1回&第2回)を、それぞれ、東京と大阪で開催しております。通常はおもてに出ない悩み事(たとえば、調査の困難の深刻さ等)など、たくさんのホンネトークが交わされました。またWEB上で、「30周年記念アンケート」を行い、現在、集計・分析作業をしております。こちらに関しましても、回答した学会員の「もっとも影響を受けた書籍」の最上位に『病いの語り』(アーサー・クライマン著)が挙がるなど、いろいろと興味深い結果が出ています。本学会の「現在と未来」を考えるデータとして、いずれも貴重なものであるように思われました。

以下、座談会とアンケートの両方の結果を見ての率直な感想を、3つ、申し述べます。

第1の感想は、保健医療社会学の調査に関しては、その精細さ/緻密さの要求程度が増しつつあるのではないかと、ということです。

「調査の困難」の実感はそのひとつの現れであるように思われます。つまり、フィールドのおおよそのことを見たり、聞いたりするだけでは、調査として不十分だと、近年感じられるようになってきた、ということなのではないでしょうか。そうであるがゆえに、許諾がなかなか取れないような「調査」を企画してしまうのではないのでしょうか。たんに、日本の医療現場が閉鎖的であるからだとか、社会科学者に対する信頼と期待が小さいからだとかというようなことではない、調査者の探究心の進化/深化に基づいた現象であるように思われました。

第2の感想は、保健医療社会学の理論に関しては、現在は「(理論的)空白期」と呼べる状況になっているのではないかと、ということです。たぶん、この背景としては、現在が、医療と保健をめぐる大きな歴史的変動期である、ということを描き出すべきでしょう。つまり、もし、かつての「保健医療

社会学」の理論というものが、「病院にいる患者」や「治療（キュア）」を基盤としたものだったとするのならば、そういう旧・理論で用が足りた時代は終わった、ということです。その一方で、21世紀の日本では、「在宅療養している生活者」や「世話と配慮（ケア）」を基盤とした新・理論が必要になっているはずなのですが、それはまだできあがっていない、ということなのだろうと思います。「いや、すでにそういう理論はある」、という声もあるのかもしれませんが、個人的には、現在の保健医療社会学の理論状況は、まだまだ、「病院医療／専門職中心主義」の母斑を帯びた理論がほとんどで「解体と創造」に向かって開かれている状態であるように思われます。

第3の感想は、他国や次世代や他領域から広く学ぶことが、保健医療社会学会の未来を切り開いていくきっかけになるのではないかと、ということです。たとえば、第44回大会の初日のナイトセッション（次項参照）で世話人をご一緒する志水洋人氏から、先日、「福祉ブリコラージュ（Welfare Bricolage）」という概念がヨーロッパにはあるということをお教えいただきました。それは、日常生活を生きる人々がどのように資源を利用しているのか、ということに関わる概念でした。つまり、福祉を手にいれるやり方が多様で個別的で、器用仕事のことに注目して、健康や福祉のことを考えていこう、という話になっていて、そういう立場からの混合法による調査プロジェクトが進行中でした。クライマンの『病いの語り』ほどにはまだ、メジャーになっていない概念ですが、生活者に注目すること、現場における多様性に注目することにおいては、類似の志向性をもっている動向であるようにも思われ（「超多様性 superdiversity」という概念も使われていました）、視野を広げると、似たようなことを考えている人はたくさんいるんだなあ、と思われました。

いささか拡散した話になってしまっていて恐縮ですが、社会の構造変動が生じているなかで、本学会の活動は、定型的なものであり続けることを許されていない、と信じております。つねに危機意識をもって、（あまり突飛にならない範囲で）新機軸を打ち出し続ける必要があると思っております。あと1年4ヶ月ほどの会長任期ですが、本学会の初期メンバーの多くもまたチャレンジャー（先駆者）だったことを思い返しつつ、若手や海外や周辺諸領域からヒントを頂きながら、提案をし続けていきたいと思っております。

2. 第44回大会について（田代理事：研究活動）

本年の学会大会は5月19日、20日に北海道北広島市の道都星槎大学で開催されます。大会長講演、大会シンポジウムに加えて、海外ゲストを招いての特別講演やプレ30周年記念シンポジウムが企画されていますので、ぜひ奮ってご参加ください。

なお、1月22日をもって一般演題およびRTDの申込受付を終了しましたが、おかげさまで多数の応募を頂きました。プログラムについては今後順次大会ホームページ（<http://medsocio2018.yupia.net/index.html>）で公開していきますので、どうぞよろしくご確認ください。

<会場へのアクセス、宿泊、会期中の昼食について>

大会会場の星槎道都大学は最寄りのJR北広島駅（新千歳空港から20分、札幌駅から15分）から2km以上離れているため、会場までのシャトルバス（無料）を運行する予定です。乗車定員に限りがありますので、駅までお早めにお越しください。運行スケジュールが決まり次第大会ホームページに掲載します。

会場へのアクセスを考慮すると、北広島クラッセホテル（会場からバスで5分程度）への宿泊が便利です。会場—ホテル間のシャトルバスも利用できます。学会参加者を対象に客室を確保しておりますので、大会実行委員会事務局（e-mail: jshms44-office@umin.ac.jp）までお早めにお申し込み下さい。

会場近辺にはスーパーや食事をする場所がありません。昼食をご持参いただくか、大会実行委員会事務局が提供するお弁当（価格：1,000円）をご購入ください。事前の申し込みが必要です。上記の大会実行委員会事務局 e-mail アドレスまでご連絡ください。なお、代金は大会受付時にお支払い下さい。

<懇親会・ナイトセッションのお知らせ>

懇親会は1日目のプログラム終了後にシャトルバスで移動して、北広島クラッセホテルのバンケットルームで開催します。くつろいだ雰囲気の中で情報交換をし、交流を深めていただければと思いますので、ぜひご参加ください。また、大会における新しい試みとして懇親会終了後にナイトセッション「質的研究法に関する随想（企画世話人：樫田美雄（神戸市看護大学）、松浦智恵美（立命館大学大学院）、志水洋人（大阪大学大学院）」を開催します。申し込みは不要ですのでお気軽にご参加下さい。

<託児について>

本大会では専門業者による託児サービスを提供する予定です。費用については利用者負担としますが、大会実行委員会が一部負担することを検討しています。申し込み方法は大会ホームページに掲載します。

3. 30周年記念事業関係報告（松繁理事：総務担当・田代理事：研究活動担当）

昨年、30周年記念事業へむけて、学会員を対象とするウェブ・アンケート調査と、評議員を中心に東京と大阪で開催した座談会を実施しました。結果は、後日、学会ホームページで報告される予定となっています。

4. 第3回理事会報告（松繁理事：総務）

日時： 2017年12月26日（火）14:00～17:00

会場： （株）国際文献社 アカデミーセンター 5階会議室

出席者： 樫田会長、朝倉理事、石川理事、伊藤理事、小澤理事、田代理事、西村理事、林理事、松繁理事、三井理事、細田大会長、山本大会事務局長、事務局 平野（記 国際文献社）

欠席者： なし

1) 2017年度 前期予算執行状況（松繁）

松繁総務理事より前期予算執行状況の報告があり、基本的に予算どおり執行中であることが伝えられた。

2) 30周年記念アンケートおよび座談会について（松繁）

松繁総務理事より web アンケートと評議員を対象に座談会を行ったとの報告があった。

3) 30周年記念事業について（含ニューズレターアーカイブ）（樫田、松繁、田代、伊藤）

松繁総務理事よりニューズレターのアーカイブについて No1～No45 が欠号している為、関係者に確認しているとの報告があった。引き続き、会員に協力を要請し、アーカイブ整備につとめる旨、報告がなされた。また、田代理事より 30周年記念プレシンポジウムは方法論に焦点を当てて企画している

との報告があった。

4) HP・Twitter 及び、ニューズレター107号の運営・編集について (西村, 松繁)

西村理事よりホームページは1か月に1回更新していることが伝えられ、変更・更新したい場合には理事メーリングリストにて依頼をすることとなった。Twitterについては情報発信等に適している為、今後も使用していくこととした。

5) ニューズレターの記事の充実化方針について (中間報告) (西村)

西村理事よりニューズレターの現状についての報告があった。ニューズレターだけでなく、最新情報をメール配信したほうが良いとの指摘があった為、定例研究会の案内等、配信したいことがあれば理事メーリングリストで西村理事に依頼することとし、配信頻度を高めていくこととなった。

6) 旅費規程について (樫田, 松繁)

樫田会長と松繁総務理事より旅費・宿泊規定について提案があり、承認された。

7) 編集委員会報告 (朝倉, 三井)

朝倉理事より、最初に、10月に開催された編集委員会について報告があった。続いて、編集諸規定、査読ガイドラインの変更案について説明があり、引き続き検討していくこととした。

8) 定例研究会の報告 (関東) (田代, 小澤)

田代理事より11月11日に看護・ケア研究部会と共催して定例研究会を開催したとの報告があった。小澤理事より次回は3月頃に開催する予定でテーマは44回大会テーマと連動したものを企画する予定であることが伝えられた。詳細が決定次第、ホームページ掲載やメール配信をすることとした。

9) 定例研究会の報告 (関西) (伊藤, 林)

林理事より10月14日に定例研究会を開催したことが伝えられ、集客に課題があったとの報告があった。今後は開催日等が決定次第、メール配信で参加を促すこととした。

10) 看護・ケア研究部会の報告 (朝倉)

朝倉理事より11月に関東定例研究会と共催したことが伝えられた。今期で役員改選があり、現在選挙を進めているとの報告があった。

11) 渉外・国際交流活動の報告 (石川)

石川理事より添付資料次第の通り、社会学系コンソーシアムニューズレターISA 特集号の原稿依頼があったことが伝えられた。大会メインテーマや機関誌内容について記載していくこととした。ネイティブチェックを行う必要があり、費用は予算を使用することが承認された。

12) 園田賞選考委員会について

田代理事より理事のなかの1名から選考委員長になることの内諾が取れていることが伝えられ、承認された。

13) 名誉会員推挙について (松繁)

松繁総務理事より現状では要件を満たしている会員がいない為、該当者なしとして対応することが提案され、承認された。今後もしも名誉会員になるに相応しい会員がいた場合は理事ミーリングリストで審議することとなった。

14) 国際文献社への事務委託契約更新について (松繁, 朝倉)

松繁総務理事より、事務委託経営の契約書について大会に関する項目は委託がない場合は請求されない為、文言は残しておくことが提案され、承認された。

15) 第44回大会について (海外研究者招聘事業を含む) (細田, 山本, 田代, 伊藤)

山本大会事務局より予算案について報告があった。委託費は業者を変更したことから前回より予算削減になっていること等が伝えられた。

16) 第45回記念大会について (田代, 伊藤)

田代理事より現段階での企画案の報告があった。5月大会時に研究活動委員会を開催する予定の為、その時に報告者等を具体的に詰めていくこととした。

17) 大会の広報のあり方と組織的分担について

大会の最新情報はどこを見れば良いのかとの指摘があったが、今後はメールで配信する情報が最新とし、配信頻度も高めることとした。

18) 退会・新入会員の承認について (松繁)

松繁総務理事より新入会者8名の承認依頼があり、承認された。また、逝去2名の報告があった。

以上

5. 定例研究会の案内・報告 (関東) (田代理事: 研究活動)

1) 案内

<2017年度第2回関東定例研究会>

日時: 2018年3月18日(日) 14:00-16:00

場所: 筑波大学・東京キャンパス 116教室 (1階)

(東京都文京区大塚 3-29-1、茗荷谷駅徒歩5分)

報告者: 北村弥生さん (国立障害者リハビリテーションセンター研究所)

指定討論者: 古山周太郎さん (東北工業大学)

タイトル: 災害支援研究の新たなアプローチ

ー障害のある当事者と共同して進める災害準備研究の有効性と課題ー

司会進行: 小澤温 (筑波大学)

これまでの災害支援研究では、災害弱者という観点で、高齢者、障害者をとらえる見方が一般的でした。今回は、災害時の準備における取組を、当事者研究の視点で、長年、関わっている北村弥生先生 (国立障害者リハビリテーションセンター研究所・室長) に、当事者の参加型リサーチの有効性と

課題についてお話をさせていただきます。指定討論者は、災害支援に関して、住民の主体性の形成とまちづくりという視点で、東日本大震災の復興研究に取り組んでいる古山周太郎先生（東北工業大学・准教授）にお願いして、当事者参加、住民の主体形成という視点でコメントをいただきたいと思えます。この企画を通して、保健医療社会学における災害研究のあり方に関しても議論を深めたいと思えます。

2) 報告

<2017年度第1回関東定例研究会／看護・ケア研究部会 共催公開企画>

日 時：2017年11月11日（土）14:00-17:00

場 所：首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス 会議室 A・B

報告者：：田中大介さん（東京大学）

指定発言者：鷹田佳典さん（早稲田大学）

タイトル：葬儀業におけるデスクアの実践と特質

司会進行：田代志門（国立がん研究センター）

本年度『葬儀業のエスノグラフィ』（東京大学出版会）を公刊された文化人類学者の田中大介さんをゲストに迎えて研究会を行った。当日は、葬儀業の概要や近年の動向を丁寧にレビューしたうえで、「遺体処置」「空間設計」「専門家への志向」「包括的ケア産業」という4つの題材を取り上げ、現代社会において葬儀業者の行っている「仕事」についての人類学的な記述と分析を提示して頂いた。指定発言者では会員で悲嘆研究に詳しい鷹田佳典さんから、生と死の移行の手助けをする mediator としての葬儀業者の位置付けや、医療者と葬儀業者との多職種連携の可能性についてコメントがなされた。参加者は27名（うち非会員8名を含む）であり、社会学・文化人類学の研究者、医療者、葬儀業者等の多様な視点からの活発なディスカッションが行われた。

6. 定例研究会の案内・報告（関西）（林理事：研究活動）

<第1回定例研究会報告>

日 時：2017年10月14日（土）13:30~16:00

テーマ：「ヘルスリテラシーと情報に基づく意思決定」

講師：中山和弘先生（聖路加国際大学）

看護情報学を専門とする中山和弘氏から、ヘルスリテラシーと意思決定支援について、国際比較も含め、多様な観点からお話しいただいた。

ヘルスリテラシーとは、健康情報を入手・理解し、意思決定を行う能力であり、周囲にはたらきかけることができる能力でもある。ヘルスリテラシーに関する中山氏の研究結果によれば、日本人はEUの人々に比べてヘルスリテラシーが低く、特に、健康情報の理解はできても意思決定が困難であることが明らかになっている。

米国では、ヘルスリテラシー向上のためのアクションプランが策定され、「情報に基づく意思決定」や「わかりやすいヘルスサービスの提供」が謳われ、ヘルスリテラシーにあわせたコミュニケーションや意思決定支援ツールの開発も進んでいる。他方、日本人のヘルスリテラシー能力は決して高くはなく、プライマリヘルスケアや健康教育に課題があることが示された。

これらの報告を受け、後のディスカッションでは、医療者、医療界に今後どのような取り組みがで

きるか/必要か、また、国の政策課題は何かといった意見交換が活発になされた。

7. 渉外・国際交流活動報告 (石川理事：渉外・国際)

学会ホームページに、欧州医学教育学会 (AMEE) 参加報告 (2017年8月) を掲載したことを報告した。また、社会学系コンソーシアムから2018年7月の国際社会学会 (ISA) 第19回世界会議に合わせて発行するニュースレターISA 特集号に掲載する各学協会の活動紹介の原稿依頼があったことが報告され、本学会については、①学会の概要 (ホームページ掲載の情報を中心に設立時期や会員数など)、2014年以降の②大会のテーマ、特別講演やシンポジウム名、③機関誌の特集テーマ、などを中心にまとめることで合意した。

8. THE 14TH APSA CONFERENCE, Hakone, Japan, 5-7th October 2018 の案内

(細田研究活動委員：アジア太平洋社会学会会長・第14回アジア太平洋社会学会大会実行委員長)

この度、第14回アジア太平洋社会学会 (APSA) 大会を、星槎大学箱根キャンパスにて、2018年10月5日 (金)、6日 (土)、7日 (日) に開催いたします。大会テーマは、「相互接続、社会変容、グローバルモビリティ：未来への可能性の探求 (Interconnections, social transformation, and global mobility: Exploring possible ways towards the future)」です。国を越えて社会学者や社会学者が結び付き、研究成果をシェアしながら、グローバルな今日的な社会課題を共に考え、国際的相互理解を深めていきたいと考えています。多くの方のご参加をお待ちしております。

<大会までのスケジュール>

2018年3月：抄録提出締め切り (口頭発表、ポスター、ラウンドテーブルディスカッション)

2018年5月15日：採択の通知

2018年7月15日：事前受付締め切り (すべての報告者は登録してください)

2018年10月5-7日：大会開催

<開催地：星槎大学箱根キャンパス>

〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原817

TEL：0460-83-8202 FAX：0460-83-8203

<お問い合わせ：apsa14th@gmail.com>

最新情報は学会ホームページをご覧ください。

<https://apsasociology.wordpress.com/conference/>

9. 追悼文：本会元名誉会員 木下安子先生を偲んで

(片平洸彦評議員、医療財団法人健和会 臨床・社会薬学研究所所長)

看護・介護分野で著名な学者・実践家であられた木下安子先生が、2016年9月5日にご逝去されました。享年89歳でした。

私はこのことを2017年1月にご遺族の方からのお葉書で知りました。木下先生にお世話になった本学会の会員は少なくないと思いますが、東大医学部保健学科生の時から木下先生に一方ならずお世話になった者として、先生への追悼文を書かせていただくことにしました。

木下先生は、1927年のお生まれで、神奈川県のご出身です。聖路加女子専門学校 (現在の聖路加看護

護大学)を卒業され、看護婦・保健婦になられました。その後、東大医学部保健学科助手を務められ、「美濃部都政」時代に作られた東京都神経科学総合研究所研究員、白梅学園短期大学教授になられ、2000年には新潟青陵大学教授・学長になられました。

私が木下先生に東大保健学科でいつ最初にお目にかかったかは定かではないのですが、その後、私が同学科を卒業して最初の就職先として東京都神経科学研究所研究員に赴任させていただいた時には、山手茂先生とともに、種々お世話になりました。研究課題として、園田恭一先生が代表者になられた「スモンの保健社会学的研究」が、木下先生と共に調査研究をさせていただいた最初であったと思います。とりわけ、「難病」スモンの原因が胃腸薬のキノホルムと判明した後の研究課題である「スモン患者の地域ケア」では、世田谷区の保健師との共同研究において、木下先生に多くのご助言、ご示唆をいただきました。先生は、1978年に勁草書房から「在宅看護への出発 権利としての看護」という著書を出されていますが、副題の「権利としての看護」という発想をされたのは、当時としては先駆的であったと思われます。

その後にまさに私が「大変お世話になった」のは、先生が「月刊 Nurse Eye」(桐書房)の編集長になられていて、「統計学」が苦手のこの私に、同誌に、看護師・保健師向けの講座「やさしい統計学」の連載をご依頼下さったことです。「苦手意識」を持つ統計学の講座を、毎月毎月雑誌に連載するのは、私にとっては相当の「苦行」で、やっと書いたと思うと、「直ぐに次号の執筆開始が待っている」状況でした。しかし、この「苦行」のおかげで、「やさしい統計学」の連載は、後に、1992年以降、桐書房から、同名の図書を刊行することにつながり、2017年3月からは、大幅改訂による「第6版 やさしい統計学」を発刊できたのです。

「やさしい」と言えば、木下先生の語り口は、本当に「やさしい看護師・保健師」そのものでした。看護・介護の現場に居た患者さんたちは、木下先生からの「やさしい語りかけ」に、どれほど癒されたかと、今でもそのように「推測」しています。

木下先生は、一言で言えば、「やさしく、強い」実践的な看護・保健研究・教育者であられたと思います。恐らく、後輩の方々が、続々とそうした研究・教育者になられることを「あの世」から見守っておられることと思います。先生のご冥福を心からお祈りする次第です。

10. 編集後記

・ニューズレターvol.107には、本学会の活動に関する多くの情報を掲載いたしました。皆様の学会活動にお役立て下さい。

・日本保健医療社会学会ニューズレターは第92号からはPDFファイルのメールマガジン形式で配信しています。もしメールマガジンの文字が読めない場合などの受信に問題がある場合は、恐れ入りますが、日本保健医療社会学会事務局(下記)まで御連絡ください。

<http://square.umin.ac.jp/medsocio/index.htm>

(西村理事：広報担当)

発行：日本保健医療社会学会
編集：広報担当(西村ユミ)
学会事務局：
東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
jshms-office@bunken.co.jp TEL：03(5389)0237